平成 29 年 2 月 28 日

第 26 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 26 回日本医療薬学会年会
年会長　松原　和夫
京都大学医学部附属病院 教授・薬剤部長

事 業 名: 第 26 回日本医療薬学会年会

主催者名: 一般社団法人日本医療薬学会

年 会 長: 松原　和夫（京都大学医学部附属病院 教授・薬剤部長）

会　　頭: 佐々木　均（長崎大学病院 教授・薬剤部長）

後　　援: 一般社団法人日本病院薬剤師会、公益財団法人日本薬剤師会
京都府病院薬剤師会、一般社団法人京都府薬剤師会、日本薬科機器協会

実施日程: 平成 28 年 9 月 17 日（土）～19 日（月・祝）

実施場所: 国立京都国際会館　〒606-0001　京都市左京区宝ヶ池
グランドプリンスホテル京都　〒606-8505　京都市左京区宝ヶ池

会場数	口演会場	:	13 会場
	ワークショップ会場	:	1 会場（日本薬科機器協会ワークショップ）
	ポスター会場	:	2 会場
	※ 優秀演題候補ポスター会場として、別に 3 会場		
	展示会場	:	2 会場

年会の趣旨

第 26 回日本医療薬学会年会を、平成 28 年 9 月 17 日（土）～19 日（月・祝）の 3 日間、国立京都国際会館・グランドプリンスホテル京都（京都市左京区）にて開催した。

日本の医療がまさに日進月歩で発展する中、医療における薬剤師の役割も大きく変革し、医薬品を供給する専門職から、医薬品の使用を包括的に管理し、薬物療法の安全性・有効性を保障する専門職へと変わりつつある。一方、近年、医療の高度化、複雑化に伴う業務負担の増加により医療現場の疲弊が指摘されるなど、医療の在り方が根本的に問われている。そのような状況の中、「チーム医療」は、我が国の医療の在り方を変え得るキーワードとして注目されており、薬物療法への高い専門性を有した薬剤師に寄せられる期待も益々高まってきている。また、外来・在宅・居宅患者にあっては、保険薬局の薬剤師がチーム医療の一員となり、病診薬連携による保険薬局とのコミュニティーチーム医療もますます重要性を帯びてきている。そこで、第 26 回年会では、テーマを「明日を創るチーム医療」とした。

本年会では、最先端の研究や先駆的な医療を進められておられる国内外の 5 名の先生方に特別講演をお願いした。教育講演では、チーム医療の実施に重要な法的解釈について法律の専門家の先生よりご解説いただいた。また、「チーム医療」「薬剤師の未来」「iPS」をキーワードとした特別企画シンポジウムも開催した。さらに、震災特別セッション、国際交流委員会企画の国際シンポジウムや日本病院薬剤師会病院薬局協議会/学術フォーラムも年会内で行った。公募シンポジウムには過去最高となる 85 件の応募をいただき、47 件を採択した。一般演題は口頭発表 302 題、ポスター発表 1396 題が採択された。口頭発表の内 45 題が年会初日の優秀演題候補セッションに選出され、口頭発表に加えて 3 日間ポスターを掲示した。最終的に 9 題の演題を選出し表彰した。

本年会では、昨年に引き続き会期を 3 日間に延長し、ゆとりあるプログラム編成を心がけた。講演要旨集は Web とアプリのみとし、冊子体は持ち運びがしやすいようにプログラム集とした。また、会場にも要旨検索用のコンピューターとプリンターを設置し、要旨集電子化に配慮した。会場には可能な限り広い部屋を使用するとともに、会場に入りきらなかった聴衆のために中継会場や室外のモニターを設置し、参加者の利便性向上に努めた。

会費等の設定

参加費	正会員	非会員	学生
事前参加登録	9,000 円	13,000 円	3,000 円
当日参加登録	13,000 円	16,000 円	4,000 円

懇親会	一般	学生
事前登録	8,000 円	4,000 円
当日登録	10,000 円	5,000 円

プログラム集：2,000 円（事前・当日共に）

市民公開講座：無料

事業内容

1. メインテーマ『明日を創るチーム医療』
2. 年会長講演　1 題
3. 特別講演　5 題
4. 特別企画講演　1 題
5. 教育講演　1 題
6. 日本医療薬学会 学術貢献賞受賞講演　1 題
7. 日本医療薬学会 奨励賞受賞講演　3 題
8. 日本医療薬学会 Postdoctoral Award 受賞講演　5 題
9. 特別企画シンポジウム　3 セッション
10. 震災特別セッション　1 セッション
11. International Symposium（国際シンポジウム）　1 セッション
12. シンポジウム（公募）　47 セッション
13. 市民公開講座　1 セッション
14. 一般演題　1694 題
    1）口頭　302 題　（うち、優秀演題候補 45 題）
    2）ポスター　1396 題
    採択後取下げ（4 題）
15. International Poster　14 題
16. 平成 28 年度日本病院薬剤師会病院薬局協議会/学術フォーラム
17. 共催セミナー　28 セッション
18. 日本薬科機器協会ワークショップ

参加者数

	参加登録				懇親会	
	正会員	非会員	学生	海外	一般	学生
事前登録	5,329	1,670	211	－	320	4
当日登録	859	1,011	108	31	70	11
計	9,219 名				405 名	

運営組織

年会長　　松原　和夫　　京都大学医学部附属病院

〈組織委員〉

赤池　昭紀	名古屋大学大学院
伊藤　善規	岐阜大学医学部附属病院
岡野　友信	立命館大学
桂　　敏也	立命館大学
川勝　一雄	医療法人稲門会 いわくら病院
河野　武幸	摂南大学
栄田　敏之	京都薬科大学
四方　敬介	京都府立医科大学医学部附属病院
但馬　重俊	NTT 西日本大阪病院
寺田　智祐	滋賀医科大学医学部附属病院
永井　純也	大阪薬科大学
狭間　研至	ファルメディコ株式会社
橋田　充	京都大学大学院
藤田　卓也	立命館大学
三上　正	京都第二赤十字病院
渡邊　大記	ダイガク薬局
磯部総一郎	厚生労働省
遠藤　秀治	中北薬品株式会社
奥田　真弘	三重大学医学部附属病院
上山　誉晃	株式会社　薬事新報社
北河　修治	神戸薬科大学
崔　　吉道	金沢大学附属病院
阪口　勝彦	日本赤十字社和歌山医療センター
高倉　喜信	京都大学大学院
谷口　昌彦	医療法人新生会総合病院
中井　清人	厚生労働省
中村　敏明	大阪薬科大学
橋田　亨	神戸市立医療センター中央市民病院
平井みどり	神戸大学医学部附属病院
政田　幹夫	大阪薬科大学
森田　邦彦	同志社女子大学

〈実行委員〉

安藤　基純	神戸学院大学
池田　義人	滋賀医科大学医学部附属病院
今井　哲司	京都大学医学部附属病院
岩本　卓也	三重大学医学部附属病院
尾上　雅英	公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院
萱野勇一郎	社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会中津病院
小林　政彦	大阪赤十字病院
高橋　一栄	社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会野江病院
中川　貴之	京都大学医学部附属病院
中村　暢彦	京都薬科大学
平　　大樹	滋賀医科大学医学部附属病院
村木　優一	三重大学医学部附属病院
森田　真也	滋賀医科大学医学部附属病院
山本　和宏	神戸大学医学部附属病院
米澤　淳	京都大学医学部附属病院
飯原　大稔	岐阜大学医学部附属病院
池見　泰明	京都大学医学部附属病院
岩永　一範	大阪薬科大学
上島　智	立命館大学
角山　香織	大阪薬科大学
古俵　孝明	福井大学病院
嶋田　努	金沢大学医学部附属病院
津田　真弘	京都大学大学院
中川　俊作	京都大学医学部附属病院
土生　康司	神戸薬科大学
深津　祥央	京都大学医学部附属病院
本橋　秀之	京都薬科大学
矢野　育子	神戸大学医学部附属病院
山森　元博	武庫川女子大学
和田　敦	神戸低侵襲がん医療センター

事業成果

第 26 回日本医療薬学会年会を、平成 28 年 9 月 17 日（土）～19 日（月・祝）の 3 日間、国立京都国際会館・グランドプリンスホテル京都（京都市左京区）にて開催したところ、参加者は招待者を含め 9,300 名を越え、昨年に引き続き多くの方々にご参加いただいた。

本年会のメインテーマは、「明日を創るチーム医療」とした。特別講演は、最先端の研究や先駆的な医療を進めておられる国内外の 5 名の先生方に講演いただいた。特別講演 1 では、京都大学大学院医学研究科の湊長博先生が「PD-1 チェックポイント阻害がん免疫療法の現状と課題」と題して、革新的な治療法として注目されるがん免疫療法を概観するとともに、臨床使用される抗 PD-1 抗体の現状と課題について講演された。特別講演 2 では、University of Minnesota の Robert J. Straka 先生が「Precision Medicine and Cardiovascular Therapeutics: An Individualized Approach Towards Optimizing Drug Selection and Use」と題して、循環器領域における Precision Medicine への薬学的アプローチについて講演された。特別講演 3 では、Memorial Sloan Kettering Cancer Center の Richard Tizon 先生が「The Impact of Clinical Pharmacy Services on Cancer Care」と題して、がん治療における薬剤師の役割について、アメリカの病院における先進的な取り組みについて講演された。特別講演 4 では、京都大学大学院医学研究科の福原俊一先生が「現場の疑問に答える研究をデザインする」と題して、臨床現場で湧いてくる疑問や悩みからどのようにリサーチクエッションを作り、どのように研究デザインを組み立てていくかを解説した。優れた臨床研究を通じて医療の質の向上に貢献すると強調されていた。特別講演 5 では、公益社団法人全国自治体病院協議会の邉見公雄先生が「生命（いのち）輝かそう日本医療薬学会～チーム医療の中心は薬剤師～」と題して、チーム医療における薬剤師の重要性について力強く語り、薬剤師に温かいエールを送られた。さらに、特別企画講演では、厚生労働省保険局医療課薬剤管理官の中山智紀先生が「最近の医療を取り巻く状況の中で薬剤師に期待される役割」と題して、地域包括ケアシステムに代表されるこれからの医療のあり方について概説し、医療における薬剤師の重要性について講演された。また、教育講演では弁護士の赤羽根秀宜先生が「新しい薬剤師業務の展開へ～法的解釈を考えよう～」と題して、新たな業務展開にあたって法規制をどのように考えていけば良いか解説された。

本年会では、年会のテーマに即して「病診薬連携による地域におけるチーム医療の推進」、「病院薬剤師の明日を語る」、「iPS 細胞を用いた新しい医療と創薬を考える」と題した特別企画シンポジウムを企画し、熱い議論がなされた。また、震災特別セッションを企画し、熊本地震における薬剤師の役割について情報を共有し、今後の災害医療における薬剤師の関わりについて議論した。

公募シンポジウムでは、多職種や施設間での連携などの新しいチーム医療の取り組みやその評価、ならびに医療薬学に関連するその他のテーマに関するシンポジウムを公募し、最終的に 85 件の応募をいただいた。特に、これまでにオーガナイザーを経験されていない方々からの応募を促した。審査方法は、①学術的意義、②医療への貢献、③社会的意義／参加者の関心、④新規性、⑤年会テーマとの関連、⑥活動実績／準備状況の 6 つの評定要素に関する絶対評価を行い、さらに 5 段階の総合評点（相対的評価）を付すこととした。12 名の実行委員による審査結果に基づき、最終的に組織委員会で 47 件を採択した。内容は多岐にわたり、専門薬剤師、他職種連携、医療安全、ポリファーマシーなどから、リサーチクエッション立案、核医学、ファーマコメトリクス、かかりつけ薬剤師など、いずれも年会テーマに相応しい内容であった。より多くの参加者が希望するシンポジウムに臨むことができるよう、各会場のサイズをできるだけ大きくするとともに、中継会場と会場外のモニターを設置した。しかしながら、なお一部のシンポジウムでは会場外のモニターにも人があふれるほどの盛況ぶりであった。日本病院

薬剤師会の「専門薬剤師制度（5 部門）」に該当するシンポジウムは基本的に最終日の午後にまとめ、一般演題との重複を避けることで、ほぼ全ての方が参加可能なプログラムとした。

一般演題は、応募いただいた 1701 題を実行委員及び年会事務局にて指定した査読委員で審査を行い、1698 題（口演：302 題、ポスター：1396 題）を採択した（採択後の演題取り下げ 4 題）。口演会場は、第 1 日目及び 2 日目においては 5 会場を、第 3 日目においては 4 会場を一般演題の会場として設定した。過去数年の医療薬学会年会において、一般演題の会場で混雑が見られたことから、比較的大きな部屋を含む 130～270 席の会場を割り当てた。その際、第 25 回年会の傾向と発表演題の内容を考慮した。大部分のセッションにおいて会場の席数の不足は見られなかったが、優秀演題候補セッションなどの注目度の高いと思われるセッションにおいては会場から参加者があふれる事態となった。一方、ポスター発表は、1 日毎の貼り替えとしたこと、広い 2 会場を準備したことで、会期を通して混雑する程の状況に至らなかった。

本年会では第 25 回年会と同様に、一般演題（口演）の中から優秀演題を選考した。まず、演題登録時に優秀演題候補として応募された 189 題について、実行委員 11 名による一次選考を行った。選考方法は、第 25 回年会におけるものを参考としたが、要旨および応募理由による書面審査とし、1 演題につき 3 名の審査員による 5 段階の相対評価を行い、上位 45 題を選出した。年会初日の二次選考では、①研究内容の新規性・学術的・社会的波及効果、②研究方法、結果および考察の妥当性、③プレゼンテーションの明瞭性（スライドレイアウトや発表方法の工夫）、④発表および質疑応答の準備状況や態度の 4 項目について、優秀演題選考委員 15 名による審査を行った。審査結果に基づき、最終的に優秀演題選考委員会で 9 題の優秀演題を選出し、2 日目の懇親会で表彰を行った。

共催セミナーとして、3 日間で 28 件のランチョンセミナーを実施した。座席数のおおよそ 80%を事前登録制とし、整理券を年会参加証と共に郵送した。事前登録の際に、応募者が殺到しサーバーが止まってしまうトラブルが起こり、関係者にご迷惑をかけてしまったが、システムを改修し数日後の再実施により対応できた。

最終日の市民公開講座では、旭川医科大学法医学講座の清水惠子先生、弘前大学大学院医学研究科薬剤学講座の早狩誠先生、名城大学薬学部病態解析学の野田幸裕先生に「サスペンスの街京都―犯罪と薬物―」というテーマでご講演いただいた。参加者も非常に多く、市民からの質問も止まないなど、とても盛況であった。

医療薬学会年会では演題数が急激に増加したため、要旨集は分厚くなり使い勝手が悪くなっていた。そこで、本年会では、要旨集を全て電子化し、Web 版要旨集と携帯端末用の要旨集アプリを導入した。演題の検索に加えて、聴講したいセッションや演題を自分のスケジュールとして登録することで大会期間中のオリジナル予定表が作成できるなどの機能を有し、ダウンロード数は 5,215 と参加者の半数以上の利用があった。また、年会会場にコンピューターとプリンターを設置するとともに操作説明者も配置し、参加者の利便性向上に努めた。ランチョンセミナーのチケット配布状況や、優秀演題受賞者の公表など、年会期間中の事務局からの連絡もアプリを通じて行うことができ、参加者にも好評であった。

子育て中の参加者を支援するため、本年会でも託児室を準備した（外部委託）。当初 1 日あたり 20 名の受け入れを上限としていたが、多くの応募があったことから受け入れ枠を拡大し、年会初日が 29 名、2 日目が 30 名、3 日目は 26 名の方に利用いただいた。しかし、小学生の応募などもあり、幼児を受け入れできない状況になってしまったことから、受け入れ年齢の再考が必要であると思われた。

昨年度に引き続き、年会の会期を 3 日間に延長した。3 連休に京都での開催であったことからホテルの予約が難しい状況であったが、大変多くの方にご参加いただいた。チーム医療をキーワードに薬剤師の将来像を見据

え薬剤師の薬物療法への主体的な参加を進めるべく、大いに議論いただいたと確信している。大きな混乱もなく盛会のうちに終えることができたのは、日本医療薬学会理事会・事務局の絶大なるご支援と、組織委員・実行委員など多くの関係者のご協力によるものであり、感謝申し上げる次第である。

第 26 回日本医療薬学会年会 優秀演題一覧

演題番号	筆頭演者名	筆頭演者所属	演題名
17-8-O16*-10	荒木　良介	大和市立病院　薬剤科	プロトンポンプ阻害薬がデノスマブ投与患者における低カルシウム血症の発生に与える影響の検討
17-10-O23*-19	上島　　智	立命館大学薬学部 医療薬剤学研究室	アピキサバン服用患者における出血症状と血中薬物濃度に及ぼす薬物動態関連遺伝子多型の影響
17-8-O15*-03	岡田　直人	徳島大学大学院医歯薬学研究部　臨床薬学実務教育学	ニボルマブ投与による末梢血リンパ球比率の変化が副作用発現及び治療効果に与える影響
17-10-O21*-08	金光　祥臣	東北大学大学院　薬学研究科	イナビルによるアナフィラキシー症例報告と添加乳糖に夾雑するアレルゲン乳タンパク質の同定
17-8-O17*-14	川田　　敬	高知県・高知市病院企業団立 高知医療センター　薬剤局	急性期脳卒中患者におけるニカルジピン塩酸塩持続投与関連静脈炎の危険因子の検討
17-10-O24*-25	佐藤　　聖	浜松医科大学医学部附属病院 薬剤部	がん悪液質の病態時における血清 IL-6 の濃度上昇とオキシコドンの血中動態および中枢症状発現との関係
17-10-O22*-13	志田　拓顕	浜松医科大学医学部附属病院 薬剤部	定量的標的プロテオミクスによるデノスマブのヒト血清中濃度測定法の確立
17-8-O18*-16	関　　利一	(株)日立製作所 ひたちなか総合病院 薬務局・データ管理センター	名札型赤外線センサーと電子カルテアクセスログ等のICTを利用した病棟薬剤師業務の見える化への挑戦
17-8-O19*-22	辻本　高志	市立札幌病院　薬剤部	腎移植後慢性期におけるオウギ末のクレアチニン改善効果および免疫抑制剤との相互作用に関する検討

（五十音順）

優秀演題選考委員長： 桂　敏之（立命館大学）

二次審査委員： 石井伊都子（千葉大学医学部附属病院）、井関健（北海道大学大学院薬学研究院）
崔吉道（金沢大学附属病院）、斎藤秀之（熊本大学医学部附属病院）、塚本仁（福井大学医学部附属病院）、
津田真弘（京都大学薬学部統合薬学教育開発センター）、永井純也（大阪薬科大学薬剤学研究室）
中川貴之（京都大学医学部附属病院）、中村敏明（大阪薬科大学）、
永山勝也（大阪市立大学医学部附属病院）、廣谷芳彦（大阪大谷大学）、本間真人（筑波大学附属病院）、
増田智先（九州大学病院）、松尾裕彰（広島大学病院）、森田邦彦（同志社女子大学）